

書評・新刊紹介

藤井淳編 『最澄・空海將來』 『三教不齊論』の研究

田 中 文 雄

四六

本書は編者の藤井淳氏と、共著者の池田將則・倉本尙徳・村田みお・柳幹康の諸氏による姚碧述『三教不齊論』の研究書である。この文献は佛教・儒教・道教を比較した論著で、佛教を最上位に置く護教文献である。三教の優劣を論じた現存する唐代の文献は少なく、極めて貴重な資料であり、日本にも九世紀に遣唐僧によってたらされ、書寫によって傳承されたという。

しかし、明治以降の傳統的佛教學の變化と、存在の未確認といった両面から、『三教不齊論』自身への注目がされなくなっていた。因みに『佛書解説大辭典』(大東

出版社昭和八年)巻四の「三教不齊論」の項目は、読みと②一卷⑦(参考)傳教大師將來越州録、御請來目録、東域傳燈目録」のわずか三行の記述である。日本佛教の一宗を確立した最澄や空海がもたらした文献としては、あまりにも少ない解説である。この理由は、著者たちの研究が出るまでは、『三教不齊論』のテキスト本文が認知されなかったことであろう。

本著での研究の基となるのは、藤井氏の「諸橋文庫本」の検出である。これは『三教不齊論』をインターネット上の目録(京都大學人文科學研究所「全國漢籍データ

ベース」で発見し、實際に東京都立中央圖書館で寫本を調査したとのことである。この寫本の舊藏者は、『大漢和辭典』の編纂者としても高名な諸橋轍次氏である。諸橋氏は徳島縣にある千福寺の所藏本を入手し、後に第二次大戦の戦火を逃れるため、同圖書館に保管を依託し現在に至った。

また、「石山寺本」と「西南院本」など、これまで單獨では注目されなかつた『三教不齊論』の別本の研究もあわせておこなわれた。完本として存在する三本は、「石山寺本」(一四九七年寫)が最古で、「西南院本」(一八五二年寫)と「諸橋文庫本」(一八六一年寫)は同系統のもので、兩本は一七七八年に高野山の龍剛によって定められた祖本からの轉寫だという。

本書の目次を紹介し、後にその概要を示したい。

・はじめに

・凡例

I 本文篇

影印

『最澄・空海將來『三教不齊論』の研究』

西南院本(高野山別格本山西南院所藏)

諸橋文庫本(東京都立中央圖書館諸橋文庫所藏)

校訂テキスト

訓讀

現代語譯

II 論文篇

唐代宗教史の結節點としての姚碧『三教不齊論』

藤井 淳

姚碧『三教不齊論』執筆の経緯と三教論争における位置づけ―あわせて空海『三教指歸』序文への

影響をも論じる

村田みお

法琳の著作との比較から見た姚碧『三教不齊論』

の特徴について

倉本尙徳

劉晏述『三教不齊論』の再検討

池田將則

『三教不齊論』と『三教優劣傳』

柳 幹康

最澄・空海請來になる姚碧『三教不齊論』より得

られた知見について

藤井 淳

・執筆者略歴

『最澄・空海將來『三教不齊論』の研究』

・ 中文要旨

・ 英文要旨

「本文篇」はテキストの影印と、校訂、訓讀、現代語譯からなる。影印は「西南院本」(高野山別格本山西南院所藏、高野山大學密教文化研究所畫像提供)本文二十丁(十表紙、裏表紙)と、「諸橋文庫本」(東京都立中央圖書館諸橋文庫所藏)本文二十四丁(十覆表紙、元表紙、裏表紙見返、裏覆表紙)とである。兩本とも約百五十年前前の寫本であるため、缺損も少なく非常に鮮明な寫眞版となっている。

「校訂テキスト」の翻刻(本書十三頁分)は、註に三三九項目の三本の文字の校勘を載せる。「訓讀」(本書十七頁分)は、註に語彙の出典等を二〇九項目にわたり記述している。「現代語譯」(本書二十四頁分)は、難讀文字にルビをふるなど、非常に理解しやすい譯文となっている。これに目を通せば、初學者の者にとっても當該文獻の全體像を理解できよう。

「論文篇」は四人の著者による五本の論文によって構

成される。以下に藤井氏による内容紹介(本書「はじめに」X～XVI頁)を参照して簡紹する。

・ 藤井淳「唐代宗敎史の結節點としての姚弋『三教不齊論』」は、『三教不齊論』を唐代の宗敎史において廣く位置づける。「摩訶止觀」からの直接の影響や法琳、湛然、最澄との關りから天臺敎學との關係についても考察している。禪や淨土敎が勃興する時代に書かれた文獻として、造像銘の三敎交渉に關係する記述や、他の文獻から檢索した用語を使い用語的・思想的に重要な佛敎文獻と共通の基盤に立っているという視點を示す。

・ 村田みお「姚弋『三教不齊論』執筆の經緯と三敎論争における位置づけーあわせて空海『三敎指歸』序文への影響をも論じる」は、冒頭に姚弋の職名や出自について推測し、續いて『三教不齊論』の構成と著述の時期、動機、論點や論調を考察する。三敎の違いを明確にし、他敎を積極的には否定しないため、他敎への攻撃性は低いと分析した。たとえば、老子の否定や敎義

の批判が見られないことを示した。『聾瞽指歸』を著していた空海は、この論調に共感を呼し、唐からの歸國後『三教指歸』序と詩を改作したという視點は興味深い。

・倉本尙徳「法琳の著作との比較から見た姚弋『三教不齊論』の特徴について」は、姚弋が關わる地域の地域的環境と、『三教不齊論』の典據資料を考究する。姚弋の郷里では「老子降臨説話」が宣揚されていたことと、『三教不齊論』の序論部分に『國臣記』(佚書)や『涅槃經』が重視されることを示す。また、最も關係が深い法琳の著作との比較により、『三教不齊論』の特徴を明らかにした。『三教不齊論』は教理ではなく聖人の優劣論に限定し、また法琳「辨正論」と同じ構成や文書形式であり、大きな影響を受けるが、法琳の「老子が釋迦を師とした」などの説を退けていると分析する。

・池田將則「劉晏述『三教不齊論』の再検討」は、『三教不齊論』と同名異書である劉晏述『三教不齊論』に

『最澄・空海將來『三教不齊論』の研究』

ついて、牧田諦亮氏の先行研究や張分良氏の兩文獻の比較考察、また敦煌寫本(スタイン五六四五)を示しながら、その文獻的性格を検討している。現存の劉晏の著述は、「僧尼不應拜君親」を建言する「義」であり、『三教不齊論』の本論そのものではなく、三教不齊をどのように論じていたかは不明であり、姚弋の『三教不齊論』と劉晏の『三教不齊論』とを比較對象として用いるのは適切ではないという。

・柳幹康「『三教不齊論』と『三教優劣傳』」は、宋代以降の成立で、『三教不齊論』に改變を加えた『三教優劣傳』との比較を行っている。『三教優劣傳』はおおむね『三教不齊論』を踏襲するが、大きく異なる點(佛教の卓越を示す論據を三つ加える、『三教不齊論』の「止道士毀佛論」四條のうち二條を採って合わせて論じ、参照すべき書物として『宗鏡錄』など十二の書名を新たにあげる。『三教不齊論』では三教を「聖言」とする調和的に發言もあるが、『三教優劣論』ではそれを削り、類似の記述もない)がある。つまり、三教の別異を強調し、

『最澄・空海將來『三教不齊論』の研究』

五〇

佛教の優越性を主張する傾向を明らかにしている。また、釋迦と摩耶夫人との關わりがクローズアップされており、民衆教化の役割があったことも論じている。

・藤井淳「空海・最澄請來になる姚弋『三教不齊論』より得られた知見について」は、『三教不齊論』の検出によって得られた知見、特に最澄・空海との關わりについて以下の五點について簡潔に述べる。①石山寺本の奥書と『天臺法華宗傳法偈』の記述と對照し、從來後者の著者を最澄とすることに疑義がもたれていたが、古い記を参照した可能性がある、②『臺州錄』『越州錄』はそれぞれの地で蒐集した佛典を載せるといわれてきたが、臺州での書寫文獻が『越州錄』に記載されており、兩錄に採録された典籍の分類は再検討の必要がある、③最澄がもたらした『三教不齊論』は、比叡山焼き打ち(一五七一年)までは、比叡山御經藏(第二十六函)に納められていた、④空海が歸國の途上立ち寄った越州で、最澄の目録を見て佛典のみならず儒教・道教の文獻を集めることを思い立った、⑤眞言宗

寺院では空海請來の佛典を集めていたから、今後も『三教不齊論』の寫本を探索することが必要である。

本書の特徴は、非常に緻密な文獻考證によるテキストの校訂と、各著者がその結實を充分に活用したことにあろう。インターネット検索が発見の端緒となるという、今日的な側面を持つ研究といえる。しかも、從前の研究を踏まえて、その説を是正したり附加したりする論文は説得力を持つ文獻研究であり、今後の諸分野の研究に裨益することが大きい出版だと考える。

(A5判、三九二頁、二〇一六年一月、
國書刊行會、一〇〇〇〇圓(税別))